

# COSMOS集



水上 比呂美選

「あすなる集」特選

やさしき訛

水野 須美子\*宮城

ていねいに光る庖丁仕舞うとき秘めごと一つ持ちたるごとし  
街中で声をかけられふり向けばスマホの人がスマホに応える  
憶せずに襦袢のジーンズ穿く人がスマホ二台をあやつる車内  
角館の黒塀つづく武家屋敷しだれ桜の桜に溺る

秋田美人のやさしき訛に魅かれつつもろこし、稲庭うどん購いたり

同じひと

長瀬 慶一郎\*福島

そのむかし放課後友と野球した資材置き場の広い空き地で  
母の日に届いたお花わたすとき好きなみたらし団子を添えた  
岸田首相と尹大統領の人柄の良さがつたわり未来を灯す  
「寅さん」の松坂慶子と「らんまん」の松坂慶子は同じひととなり

アントニオ猪木のサイン色紙ありわが町に来た遠い思い出

ごみが少ない 山口 清子 群馬

すこしづつ変化になれて発見すひとりぐらしはごみが少ない  
ドタバタとあれやりこれやりほいさつさ独り芝居のごとき一人居  
曇天にしみじみおもふ悩ましき物価の値上り止まぬ戦争  
一メートル五十に満たぬ身長わたしサイズの調理台欲し  
すずらんの小花はアイドルそを囲む葉は親衛隊のごときおもむき

ダム湖をのぞく 吉弘 藤枝 埼玉

右向きに眠るくせつき何時よりか右肩疼く目覚めとなりぬ  
音立てず忍者のやうに歩みをりリモートワークの息子のそばを  
人里も温泉街もこの底か紺青に澄むダム湖をのぞく  
熊よけの鈴をならして湖畔を行くダム見学の子どもの列が  
観光の名所となりてダム湖行く遊覧船の客が手を振る

遠花火 荒川 ゆみ子 東京

差し出し人わからぬ優しい手紙なり植ゑた覚えのない白すみれ  
MRI検査の前にプラチナの指輪外して指は軽やか  
四十年つけたリングは左手のお姉さん指にくびれをつけて  
右耳からマスク外せば去年より奇麗に薔薇の咲いてる五月  
白鳥座のやうな十字路突つ切つて土手まで駆けてもまだ遠花火

鈴木 千登世選

紙の本 清水 佑太郎\*東京

膝の上に我が犬乗せて本を読み五分に一回ずつ目を合わす  
日曜の午後はこころの螺子巻かず犬の時間だからだを溶かす  
前作はリプロで予約して買った村上春樹をキンドルで読む  
紙の本読めるのならば読みたいが紙の本売の店は遠くて  
六年の月日の重さに耐えているランドセル縫う糸の太さよ

クバ 扇 藤田 邦彦\*東京

「この辺は墓ばかりです」とこともなげ那覇の裏町宿の主人は  
国際通りビルの真裏の亀甲墓ただ青草の茂れるがまま  
クバ扇探し回りに行き戻る牧志市場に灯がともるころ  
腹にのせた三線小さし与那国の歌者ウナグニ与那覇氏巨漢に候  
クバ扇ウバ作る青年与那覇氏は巨漢髭面笑顔がよろし

友達と仲間 阿部 直子 新潟

カーテンを閉めたとたん雀の声にぎやかになる春の夕ぐれ  
マスクとり口紅ぬればシヤキツとす私には今日行く場所がある  
心電計胸に付けられなにとなく心のぞかるる思ひの一日  
ピチピチと魚の跳ねる音たててポプラの若葉ひねもす揺るる  
友達と仲間は違ふと小一がアニメを見つつ五歳に言ひぬ

あやこせんせ 佐藤 彩湖\*新潟

棒の先におたまを付けた道具持つ翡翠拾いの人ら浜ゆく  
わたしよりおしゃれでじゃや馬老い母が膝病みて心沈みがちな春  
深更の理科室カタカタ音たてて水槽のカメ脱出はかる  
黒姫山の姫の雪形だんだんとお猿に変わりはつ夏となる  
「あやこせんせ」って生徒呼ぶからありふれた佐藤の姓もいいなと思ふ

蛙 菊池 むつ江 長野

さくる辺に出でし蛙はねずみ色これは地の色？はた保護色か  
夕暮に外の面のあやしき声訪へば水のなき田にはや蛙なく  
せせらぎにお色直しの蛙見つ頭部はみどり尻はねずみ色  
三度めの代掻きすみし水張田は晴舞台まつホールのかがやき  
「減反を有事にそなへ増産へ」今朝よむ記事はおだやかならず  
小島 なお選

土曜の午後は 稲吉 裕子\*愛知

緑少なき街と気付きぬ人参畑ただ一区画あおおとして  
ずっとずっと友だちで居てほしいから土曜の午後はアールグレイを  
樹の洞に古き詩型を閉じ込めて桜の花は重々と咲く  
おしなべて地上のこえは吸われゆく澄明な空のラツパ水仙  
水琴窟の音色かすかに地の底ひ土偶は眠る千年を経て

ふとん太鼓 笹倉悦子 兵庫

お祭りの祝儀を集めに来し青年ふとん太鼓と同じ赤着る  
電飾のふとん太鼓が村中を練り歩きたり三年振りに  
独り居の我を案じてサボテンが友から届く「不審者来ぬやう」  
夏向きにカットされたるチャウチャウ大顔とシッポに毛が残されて  
渋滞の高速道の(ETC)われは(一般)を一人通行す

ウグイスもどき 青木淳子 鳥取

さつまいもと舞茸のごはん炊ける間を黄の紙でをるウグイスもどき  
欲張つて掘つた筍十五本やぶの斜面をひきずり下ろす  
靴みがきの日と決めてみた日曜は二十のわれの父孝行日  
高一の孫のはきるるローファアの黒ひかりをり春の陽射しに  
六匹のカメムシ路にころがれり夫が消毒せし垣根添ひ

藤棚の下 桜庭さわね 鳥取

園児らに応へシニアの男性が手を振り返す藤棚の下  
うぐい突き漁の季節を待ちてゐる(大堤池)しづかに眠る  
傘の柄を肩にひつかけ闊歩せる先輩逝きて二十年過ぐ  
書けぬなら書けない事を書けばよいさう言ひくれし恩師逝きたり  
藤棚の下に鯛焼たべながら散る花びらにあしたを思ふ

いいのです 樺 かの 広島

一雨ごとの力をうけて柿の木はひたひた緑を満たしゆくなり

わが視野をすーつと横切る鳥の影心あらざるゆゑの軽さに  
しつかりと孤独ころがす胸底に薄き手をした亡母捜せり  
ただじつと見てゐるだけでいいのです佇む鷺が僧衣をまどふ  
このまんまこのまんまこそ幸せと空の青さが目くばせをする  
鈴木 竹志選

バーゲン 植田静香\*香川

鉢植えの乙女椿を地に植えて自立を促す明日のために  
思いだすふる里のことと夕やけこやけの流れる五時に  
「さあやるぞ」リポビタンごとく飲み干して庭の草抜きはじめるわれは  
バーゲンを知らすチラシに通院を忘れて夏の服買いにゆく  
病院はどうだったかと夫が聞く予約日忘れバーゲンに走り

五月に乾杯 池内祥子\*愛媛

あやめ咲き晴れ渡りたる村の空久しく見ない鯉幟恋う  
茶色の毛ふさふささせて道渡る毛虫に出した足は止め置く  
桑の木の下から見ている蜥蜴の目善か悪かを見定めている  
うつつらと汗かく午後は冷やし置くレモンスカッシュ五月に乾杯  
苺摘みジャム作りつつ老い止める呪文となえる若葉の五月

シヤイな友 井下裕子 愛媛

ランドセルを姉が前後かけ一年生は道草しつつ笑顔で帰る  
県展のチケットあるとラインありシヤイな友からシヤイなお誘ひ

ひよつとして出展してゐる予感して先づ一番に日本画の階  
出展を知らずに巡る美術館友の日本画壁に見付ける  
白樺と笹の葉の道奥深く友の日本画味はひ深し

孫ひより 山本辰雄 長崎

入院と伝ふる嫁は涙ごゑ「すぐに向かう」と返事をした  
「私だけパパに会えないの」きく孫にける言葉もなく立ちつくす  
ふくらまぬフーセンガムを噛んでをり山法師の花庭に咲き満つ  
孫ひよりジグソーパズルを組み立てる「パパはどんな」と一言も言はず



影山 一男選 「その二集」特選

授業のあしあと 浜野昌子 北海道

授業後に「楽しかった」と言ひに来し小柄な少女のバラ色の頬  
黒板を見れば授業のあしあとが証拠のやうに残されてをり  
風を受け葉裏さらさらひるがへる風響樹とはポプラの異名  
特養の母の居室のあたたかさめぐらす写真の私の笑顔  
本音をば冗談めかし母の言ふ「会いたい人には今のうちにね」

横になりテレビを見れば乗りてくる孫にすまして重しと言へず  
ゑんどうごはん 大津慧美子 大分

ばつさりと剪枝されるし御社の大楠の若葉ゆたかに生ひ立つ  
初生りのゑんどうごめに入れて炊くあを燻めけるゑんどうごはん  
スーパでマスク着けざる人に会ふ「もういいかと」と苦笑ひして  
グラウンドゴルフのマスクは自由にと言はれても着く日焼け予防に  
媪一人住みぬし家は壊されて庭土の無き建売の建つ

鳥の声 清野洋子\*青森

葦がまだ去年の枯れ枝茂らせてすずめが一羽、また一羽来る  
数週間前にはつくしがあつただ我が物顔のスギナが語る  
ゆつくりと歩く日もあるゆつくりと歩けば見える路傍のすみれ  
上腕の筋肉に触れまたひとつあなたを知つた日の鳥の声  
日常は行って来ること繰り返す「いつてらっしゃい」「おかえりなさい」

桐の花踏む 工藤玲音\*岩手

イヌワシの剝製は飛ぶにせものの岩手の空の模様壁に

朴の木を見上げて「ほう」と言わされた授業をいまになって好きかも  
かつてした豪語をひとつずつ潰すように落花の桐の花踏む  
ぬっしりとベイクトチーズケーキ来る博物館の二階の喫茶  
歩くのは話しつづけるためですがなんじゃもんじゃの花見ませんか

忘れたいこと

谷 真 樹\* 神奈川

青・白のゴミ焼却所の煙突が「友だちなんか要らない」と言う  
もうなにも伝えたいこと無くなって多摩川の岸で水きりをする  
滑らかで平たい石を探しては忘れたいこと遠くに放つ  
水面をとびとびにゆき力尽き小石は沈み本心も消え  
タンポポがロゼットになり冬を越すがえた気持ちそのままにして

筆拭きの色

清 水 美 里\* 東京

常雨の星より出て長靴と傘で揺られる千代田線、晴れ  
森の絵をよく描いているのがわかる絵の具セットの筆拭きの色  
自殺者が出たとう高層マンションのペランダに鯉のぼりはためく  
読点が多いメールを書く人のわかってほしさ わかってあげる  
その罅はいつ入ったの裂け目から恨みがましく水中花咲く

福士 りか選

モササウルス

森 崎 洋 子\* 静岡

「緋竜」なる名君もちたるさぼてんの紅きトゲの間ナメクジは這う  
外出の予定なき日は雨音のリズムも軽くママレード煮る

急用を思い出したかダンゴムシUターンして早足になる  
香ばしく小麦の焼けるパン屋前散歩の犬が坐して動かず  
ゴムボート部屋に広げて子どもらはモササウルスを釣ると言いけり

靴が要る

小 田 沙也加\* 愛知

特別な反応だけを教わって理科の授業はひらかれた街  
教育という産業のほの暗さ シャーペンの芯ポキポキ折れる  
短編のように終わって始まって講義ノートに挟んだ栞  
六月の南中高度はてっぺんにあなたの日傘はあなたの上に  
先生と呼ばれて苦しい 先立って進むためにはまず靴が要る

お出かけします

深 沢 泰 一 三重

音ひとつせぬ初夏の家の奥にことしの豆の飯炊きあがる  
家にある硬貨をぜんぶ集めたら六九六円お出かけします  
たくあんとどんぶり飯と素うどんを食べてたのしきはつなつの昼  
柳屋でうどんおかずは飯食へば正勝つちやんがふらつと入り来  
タオル地のおくるみの中に眠りたる弟がわが家に来たりし五月  
かげろうの日々

八 木 美和子\* 大阪

ひとり来て定家思えり小倉山ふもとの池に蓮の花咲く  
松の帆をかけて陸路をゆくという鹿苑寺から漕ぎ出す舟は  
バラ園の香りを乗せて春風が揺れゆくわたしの心も乗せて  
五月雨の夜が明ければ瑠璃色の生駒の山よ乙女の間  
かげろうの日々を日記に書き綴る言葉に息衝く文学の芽が

北斗七星 大池 アザミ\*兵庫

今家に足りないものは野菜だけ自分に言って買い物に行く  
地図アプリ見てもわからず結局は人にたずねてたどり着く店  
期限切れ卵を食べてパンも食べ家族に恐れられる不本意  
どの星を結べば北斗七星か以前はすぐにわかったものを  
アイフォンの不調を息子にみてもらうかつてわたしが全能だった

田中 愛子選

ミサイルに折り鶴 日野 幸 吉\*広島

ミサイルに折り鶴つけて発射する岸田首相の「日本の選択」  
指二本マップ広げてなぞりたり北アルプスを走破すること  
頂の小学生の「ヤッホー」は登りいる身に春風のごとし  
山頂の小学生ら去り行きてしじまに望む春の山なみ  
繁茂せる若葉抜けて山の肩浴びる日差しの夏めきにけり

なつかしき声 松岡 綾子 香川

「あやこさん」なつかしき声で母が呼ぶ霞みの国より戻りし一瞬  
電源の入れ方戸惑ふ研修医我は検査の第一号とか  
久々に古希の夫の笑顔見た「今夜はカレー」と言つたとたんに  
草抜きを毎日続ける気骨あらば大概のこと出来るだらうに

でこぼこのテントの床は耐へられず二人と一匹キャンピングで眠る

母の 日 池川 紀 江 愛 媛

去年より玉太りよく玉葱はひと畝よりまあるい顔出す  
わが庭は甘藷に南瓜トマト紫蘇いつの間にかやら畑にかはる  
朝まだきまどろむ我は雨音に晴耕雨睡とふたたび眠る  
いそいと人れ歯補聴器老眼鏡を身につけ夫はゴルフに行けり  
愛想のなき息子より母の日に小つちやな花が昼頃届く

和 布 江越 国 弘 長 崎

山頂に町の時報の「野ばら」ひびくヤマボウシの花に聞かせるごとく  
我を待つ車ははなびらあまたつけ校舎のスポットライト浴びをり  
灯に照りて車が白馬のごとく待つ残り仕事に疲るる夜更け  
胃によいとキラソウ干してくれし友花咲く見ればその顔浮かぶ  
道にも墓にも和布干されて香るなり今日口開けの五島の和布  
わ が 猫 原 万 紀 長 崎

一陣の風に波だつ藤の花むらさき引きて水張田に散る  
工事現場に首折りたたむシヨベルカー夕陽に落とす影の寂かさ  
きのふありてけふなき命わが猫を路肩に抱けばその死のかるさ  
まだ動くもぐら唾へて見せに来た飼猫逝きて一年が経つ  
入院も二度目となれば車椅子漕いで洗濯にコンビニに行く